



## 石碑は江戸時代の文化 「拓本」という紙で今の原形を 後世に残すのが私の役割です

横山淳一さん  
(石碑の拓本作成)



「いつも『たんぼ』で石をたたいて拓本を取っているので、指先が一年中水が力と温かいんですよ。」と気さくに話してくれるのは青柳にお住まいの横山淳一さん。早稲田大学で書道の講師として勤務するが、たわら石碑の拓本の手拓に取り組んでいらつしやいます。

拓本は石に彫られた文字の凹凸を墨を使って紙に残す手法で、遣唐使によって伝えられたと言われています。横山さんが初めて拓本を取ったのは高校1年生のとき。当時はこの家にも煙突がありませんでしたから、その煤とオリブ油を練って作った墨を使用しました。きれいに文字が浮き出たのでびっくりしたそうです。そんな横山さんが本格的に拓本にかかわるようになったのは、進学した東京学芸大学で書道を専攻する一方、昭和55年に早稲田大学の加藤 護名

「石は無機質ですが、そこに書家、石工が携わって命を吹き込んでいくんです。そしてその石碑から地域の過去の出来事、人の活躍など時代背景が分かります。まさに『生きた資料・財産』なんです。」と横山さんは話してくれました。

普教授の研究会に参加したのがきっかけでした。そのとき加藤先生から教えられた、早稲田大学名誉教授の會津八一博士の実物を学ぶことの大切さ、「表字」に感動したのだからです。

「石碑に彫られた字を指でなぞるのは、書道の分野においても『生きた字』を学べることです。いつも学生にそのことを話しているんです。写真では表わせない、石に刻まれた文字の線の美しさをそのままに表現できる拓本による美学の大切さを後世に伝えたいと、これまで数千枚もの拓本を取ってきました。」と横山さん。

拓本の魅力を伺うと、「江戸・明治時代の石碑は、蔵を建てるくらいお金のかかることでした。石工にも腕の良し悪しがあつて、近年では窪世祥、廣群鶴、井龜泉などが名石工と言われています。狭山市にも井龜泉の彫った石碑がありますし、近ごろ茨城で窪世祥の彫った石碑を発見したときはとても感動しました。そういう名工の石碑を拓本に取るときは心が躍ります。文字が生きているから一層気合も入ります。」と熱心に語ります。心に残っている名碑は入間市の宮寺にある窪世祥の刻した「重剛茶場碑」。よい石碑というのには近くに行くのと何となく分かります。「おい」といつか勘で分かるんです。」と話してくれました。



横山さんの取る拓本は「蝉翼拓」。淡く透き通るような墨の色で透明感を出す手法です。

そんな石碑に刻まれた文字に魅せられて拓本を取り続けている横山さん。拓本を取るときには「紙の気持ちになること」が一番気をつけているそうです。作業はすべて屋外です。から天候に左右されます。紙を水だけで石碑に張るので、特に風の影響を受けやすく、日ごろから風には敏感になります。拓本に適した日は、空気がしっとりした日ですが、季節に関係なく一年に一日くらいしかありません。私はこんな日を「拓本日」と言っているんです。」と、楽しみに話されます。そして、結構作業もきつくて、真冬でも体の芯から暖まるし、夏場は汗がしたり落ちてきます。と、少々の苦勞話も出てきます。今後の目標は、石碑は風雨に当たる戸外にあるから、少しずつ風化が進んで文字がぼやけてしまつてます。そうならないうちに、拓本に残しておくのが私の役割。いつかは全国の石碑を本にまとめたいし、拓本の美術館を作りたいですね。」とのこと。

これからも水が力かした温かな指先で、素晴らしい拓本を取り続けてくれることでしょう。

# 住みなれた地域で 安心していきいきと暮らせる 福祉のまちづくりを推進しています



## 社会福祉協議会



【リポーター】  
青木理恵さん(上奥富在住)

リポーターズアイでは、行政のしくみや話題性のあることから、市内のいろいろな施設などを、読者がレポートします。



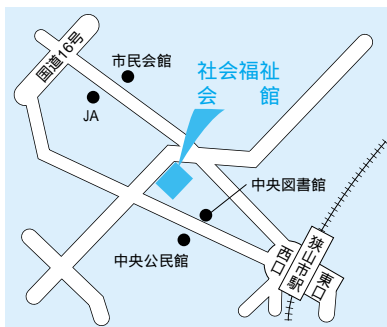
福祉教育も社協の事業。「段差はこうやってこえるんだよ。」とボランティアの指導で、子どもたちから福祉を身近に感じられるよう体験授業を行います。

皆さんは、社会福祉協議会をご存じですか。今回は、地域の中心となつて福祉のまちづくりを進める社会福祉協議会、通称「社協」について池田事務局長に伺いました。

社協は全国の市町村に必ず設置されている、公共性と公益性の高い社会福祉法人で、高齢者や障害者の福祉に関するサービスを中心に事業を進めています。日外出できない人や寝たきりのかたの介助を支援するための車いすなどの貸し出し、防水シートの給付などのほか、介護に関する相談や心配ごと相談を行うなど、事業を通して高齢者や障害者が外に出るきっかけ作りを考えています。また、社協には市内の各地区に支部があり、独り暮らしの高齢者の食事会や友愛訪問、安全確認なども行っています。これらの取り組みには地域を知っている人々の協力がなくては

はならず、多くのかたがボランティアとして活動しているのだそうです。社協はボランティア活動の拠点としてボランティアセンターを社協の中に設置して活動の仲介などを行い、社会に根ざす手助けをしています。ここには手話、点字、送迎などで団体や個人がボランティアとして850人も登録しています。私はボランティアという言葉から、福祉を連想しましたが、趣味や特技など自分の持ち味を生かしたいという人ならだれでも登録できるのだそうです。そして、何かお手伝いできないかな?という人のボランティア活動のきっかけづくりとして講座なども開催していますので参加してみたいかがでしょうか。

またボランティアを受けたい人から、こんなことをお願いしたい。」という依頼があると、「コーディネーターが直接その人に会い、どんなお手伝いが必要か伺って、登録しているボランティアの中から条件に合う人を探し、スムーズに活動できるような橋渡しをしています。以前はボランティアというやりたい人がやれば…」という雰囲気だったそうですが、最近は学校でも福祉教育が取り入れられ、ボランティアをしている人が体験などを話したり、高校生に高齢者のお世話を体験してもらったり、ワークキャンプなども開催しています。ワークキャンプでは、高校生と高齢者の気持ちが通じ合い、帰ると



社会福祉協議会(社会福祉会館内)  
入間川2 4 13 ☎954 0294

きには別れ難くてお互いに泣いてしまつこともあるそうです。ふれあつこの大切さを感じました。そしてさまざまな立場の人が、お互いに理解と交流を深めるために」とはじめられた、毎年5月に福祉団体やボランティアのサークルが参加して、ハイドパークで開催されている、ふれあい広場は今年で23回を数え、年々参加者も増えているそうです。私も子どもを連れて行ったことがあるのですが、小さいときから高齢者や障害のあるかたと過ごすことができるこのよつなイベントがあるのもとてもよいことだと思えます。

地域福祉の拠点となる社協、家族の介護や障害のことは、人に言えないことも多いと思いますが、そんなときこそ、私たちを活用してほしいですね。高齢者や障害者が外に出るための、きっかけ作りをするのが私たちの使命です。」と話す池田事務局長の言葉に、私も肩肘張らずに、できることから始めようと思えました。